

# 会計測定の基礎

—インフレーション・アカウンティング

G. ウィットイントン 著・辻山栄子 訳

(A5判・272頁・定価3,780円(税込), 中央経済社刊)

評者=石川純治 ■駒澤大学教授



本書の原題は「インフレーション会計」であり、1970年代のインフレ期に活発に展開された代替的会計測定システムをめぐる論争がその背景にある。その論争を読み解くため、特にその理論的基礎について書かれているのが本書である。およそ20年前の1983年に書かれているので幾分年月を経てはいるが、訳者あとがきにも書かれているように、今日的な時価会計での資本利益計算の問題、とりわけその理論的基礎の考察にとっても充分参考になる理論書といえる。制度の変革が理論に先行して進んでいるようにみえる今日の状況のなか、会計測定システムの「構造の問題」を扱っている本書の意義は大きい。

原文の難しいところもこなれた日本語訳で非常に読みやすくなっている本書は、7章の構成、すなわち第1章「インフレーション会計入門」、第2章「基礎概念」、第3章「取得原価主義会計」、第4章「インフレーションと一般物価水準」、第5章「現在価値システム1：評価」、第6章「現在価値システム2：資本維持概念と実質価値会計」、第7章「総括と展望」からなっている。現在価値会計が2つの章で論じられているように（「評価」と「資本維持」の側面）、この2つの章がとりわけ今日の公正価値会計とのかかわりにおいても重要なところであろう。

本書を一読して、きわめてバランスのとれた著作であるという点がその特徴としてあげられる。そのことは、たとえば、理論のみならず実証にも目が行きとどいており、そのいずれにも偏っていない点、特定の会計測定システムに偏重せず、代替的会計測定システムのそれぞれの長短が冷静な目で相対評価されている点、文章説明に終始せず各章を通した一貫性ある数値例および代数的表現によって理解を手助けしている点、さらにはサーベイ文献の豊富さ、特にキャンピングやスウィニー、エドワーズ＝ベルなど今日ほとんど読まれなくなった古典的文献、さら

には会計学のみならずヒックスやフィッシャーなど経済学の文献が渉猟されている点、などにみられる。

本書の読み方はいろいろありそうだが、特に今日的会計問題との接点および評者の問題意識からは、たとえば、利益概念とりわけ最近の業績報告のIASB案とのかかわり、現在価値会計と今日の金融商品会計とのかかわり、理論と実証のあり方および両者の会計基準とのかかわり、アカデミズムとプロフェッションの関係、会計と政治のかかわり、古典の現代的意義などの問題意識をもって読むと、70年代の会計論争と今日の会計問題とのいくつかの接点が見出せるだろう。紙幅の関係上、3点だけ述べてみたい。

業績報告のIASB案とのかかわりでは、特にその基礎にある「情報セットの提供」という考え方（たとえば200, 222頁）、およびその報告形式とのかかわり、とりわけ「評価」の問題（多欄式）と「資本維持」の問題（多段式）がどのようにかわるか（180, 196, 199頁）。金融商品会計とのかかわりでは、（実物と区別される）金融商品は貨幣性資産／非貨幣性資産の分類（34, 94, 129, 176頁）とどうかかわるか、および資本維持に関して金融商品会計ではむしろ生産力維持は妥当しないのでいかなる資本維持（IASCが示した現在市場収益率資本維持）が考えられるか。理論と実証のあり方および会計基準とのかかわりでは、本書が書かれた当時とは両者のアンバランスが逆になっている点（164, 231頁）、およびアカデミズムとプロフェッションの関係でも逆転している点（たとえば192頁）、いずれも今日のアカデミズムのあり方を考える際、興味深いところである。

国内外の会計制度に各種委員として密接にかかわる辻山教授が、多忙を極めるなか、とりわけ会計測定の構造を扱った本書をしかも『会計測定の基礎』と改題して翻訳出版された意図を充分汲み取れば、本書の今日的意義はおのずと明らかであろう。